20180626 毎日新聞京都面

京大学士山岳会 チョゴリザ登頂60年シンポ

探検大学 開拓者は語る

京都大学学士山岳会（ＡＡＣＫ）隊が1958年にヒマラヤの未踏峰チョゴリザ（7654メートル）に登頂して60周年を迎えるのを記念したシンポ「探検大学の誕生」が今月17日、京都市左京区の京都大で開かれた。この年は第1次南極越冬、アフリカでの霊長類研究、ブータンやネパールでの植物学、人類学研究など京大関係者による学術探検が一気に花開き、「探検大学」と呼ばれる一つの契機となった。世界各地で活躍する研究者がフィールドワークの魅力を語り合った。【榊原雅晴】

■未知への魅力

チョゴリザ初登頂者の神戸大名誉教授、平井一正さん(86)は「当時は高山病の知識が乏しかった。高度障害で顔がむくむのは今では常識だが、当時は理由が分からず、『栄養失調ではないか』と言われた。高いところに登った後は低いところで眠り体力を回復させるという常識もなかった」と、何もかもが手探りだった初期ヒマラヤ登山の苦労を回顧。だが困難を乗り越えて未知の頂に達した感動は大きく、「一度注入された未知への魅力という毒気は計り知れず、人生すべてがこの毒気に支配された」と、その後の人生に与えた影響を語った。

平井さんは神戸大隊を率いてクーラカンリ峰やシェルピカンリ峰などの初登頂を成功させたが、「一見ばかげた、役に立たないと思われることも、それに価値があると判断したら、全力でその達成に努力し実現させる。そのワクワク感こそロマン」と若者へのメッセージを送った。

■自然がほほ笑む

平井さんがチョゴリザに登頂したのと同じ26歳でゴリラ研究のため初めてアフリカを訪れた山極寿一・京大学長は「登山や探検に科学者を連れて行き、学術研究をするのがＡＡＣＫの精神。探検大学のルーツはＡＡＣＫにある。私の師匠は伊谷純一郎さんだが、その師匠はＡＡＣＫ創設者の今西錦司さんだ。今西さんは立派な基地をつくり、そこからキャンプを延ばしてゆくヒマラヤ登山の極地法を研究に持ち込んだが、伊谷さんは少人数で自然に飛び込んでいく方法をとった。野生動物に付き合うには自然の中に裸で入っていくことが必要だったからだ。だから学生を一人でアフリカに置き去りにし、『後は自分でやれ』とほうりだす。学生は一人で立ち上がるしかなかった」と、かなりワイルドだった教育方法を紹介。だがこうした困難を乗り越え、自然と身体で付き合ううち、「自然がほほ笑み、誰も見たことのない姿を見せてくれるときがやってくる」というフィールドワークの醍醐味を語った。

■行って何をするか

探検部ＯＢの安成哲三・総合地球環境学研究所長は「西堀栄三郎・第1次南極越冬隊長の『南極越冬記』や、ダーウィンの『ビーグル号航海記』を読んで南極や南米のパタゴニアにあこがれた。だが探検部ではただ『行きたい』というだけではだめで、『行って何をするのか?』が問われた。そこで『なぜ中緯度のパタゴニアに大きな氷床が存在するのか』というテーマを設定し、そうそうたる先輩を説得し、パタゴニア探検が実現した。探検がきっかけとなって研究が継続し、パタゴニア氷河の半世紀にわたる変化が明らかになった」と、探検で自分なりのテーマを持つことの大切さを訴えた。

また若者たちに自由にチャレンジさせる一方、探検部長の教授やＯＢらが資金集めなどで支えてくれた経験にも触れ、「若手を信頼し、やらせることが重要」と話した。

「宇宙探検を目指せ！」と話す土井隆雄さん
＝京都市左京区の京都大で

■宇宙を目指せ！

日本人で初めて宇宙での船外活動を行った宇宙飛行士で、京大宇宙総合学研究ユニット特定教授の土井隆雄さんは「ガガーリンが1961年、人類で初めて宇宙を飛んだとき、果たして人間が宇宙で生きることができるのか、誰も知らなかった。今日、人類は宇宙でも地上と同じように活動できることを知っている。宇宙もまた私たちの生存圏になっている」と指摘し、人類が宇宙に展開するための総合科学としての「有人宇宙学」を構築したいと抱負を語った。

また宇宙でのミッション（任務）を果たすには探検同様、「仲間の信頼を得ることが大切」と指摘。「京大から宇宙飛行士を輩出し、宇宙探検を目指してほしい」と若者を激励した。

このあとブータンでの老人健診システムづくりや、アフリカのボノボ、ボルネオのテングザルなどの生態調査に取り組む若手研究者を交え「これからの探検大学」をテーマにディスカッション。「もし大学生に戻れるなら、どんな探検がしたい?」「宇宙で山登りをするなら、どこが面白いか?」など、奇想天外な話題も飛び出した。司会はＡＡＣＫ会長の松沢哲郎・京大高等研究院特別教授。